

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00278

研究課題名（和文）江戸期の往来物及び番付を中心とすることば遊び文献資料の研究

研究課題名（英文）A Study on Material of Play on Words in the Edo Period

研究代表者

小野 恭靖（ONO, Mitsuyasu）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50194600

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代後期の見立番付や往来物、おもちゃ絵、瓦版などの文献資料の中に見られる日本語のことば遊びに注目して、当時の人々の日本語に対する関心の有り様を分析するとともに、現代に生きる私たち日本人が忘れていた日本語の面白さや特徴を具体的な資料をもとにして浮き彫りにすることができた。図説百科事典である『和漢三才図会』のパロディーである『附会季撰草紙』『大新板附会三才図会』初編・二編・三編、『新版附会三才図会 初編』や擬人名を題材とした見立番付『人名附物見立相撲』、さらには重言を題材とした『重言見立大角力』『能人の言重言くらべ』などを図版写真・翻字とともに紹介し、成立の位置づけを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来忘れ去られていた江戸時代後期の見立番付や往来物、おもちゃ絵、瓦版などの文献資料を博捜し、そのうちの日本語のことば遊びに関わる資料を抽出して研究を深めた。その結果、当時の人々の日常生活の中で用いる言語である日本語に対する興味関心がどこにあったのか、さらには日本語とどのように接したのか等について分析した。グローバル化が叫ばれて久しく、また多くのインバウンドで賑わう今日、私たち日本人が日本語とはどのような言語であるかを、先人から改めて教えてもらうことができることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Through studying Japanese play on words such as Mitatebanzuke Ouraimono Omochoe, Kawaraban in the Edo period, great interest people who lived in that era toward Japanese language was analyzed, and fun and features of Japanese language that Japanese people forget now could be recognized based on those materials. Koiztsukekisenzoushi, Ooshinhankozitsukesansaihue, Shinhankozitsukesansaihue, Hi tononotukumonomitatesumou, Zyugonmitateosumou, Yokuhitonoiyugonkurabe were introduced.

研究分野：日本文学

キーワード：ことば遊び 見立番付 おもちゃ絵 瓦版 往来物 番付 江戸時代 文献資料

#### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は多くのことば遊びを内包する日本語の特性に深い関心を持ち、古代から現代に至るまでの日本語話者たちがどのようなことば遊びを行ってきたかについて明らかにしたいと考えている。そのため、日本語によることば遊びの実態を、文献資料によって明らかにするため調査を重ねてきた。そして最終的には古代から現代に至るまでの日本語ことば遊びがそれぞれの時代においてどのように展開されているのかについて明らかにし、通史の構築を目指している。本研究は平成21年度から平成24年度までの間「ことば遊び文献資料の調査および文学作品におけるその受容の研究」と題する課題で科学研究費補助金の交付を受け、ことば遊び文献資料の調査ならびに収集を行った研究期間中に着想を得た。しかし、その時点では膨大な量に及ぶ江戸期の見立番付資料のごく一部しか披見することができていなかったため、実際に多くの見立番付を閲覧する経験を積み、その中にことば遊びにかかわる作品群が大量に存在することを確認し、本格的な研究に着手した次第である。

#### 2. 研究の目的

前述のように、日本語のことば遊びを、文献資料をもとにして構築する体系的な研究はいまだに十分に行われているとは言えない。本研究では、数多くのことば遊びを内包しながら、これまでほとんど調査が行われていなかった江戸期の往来物及び見立番付という文献資料を博捜し、江戸期のことば遊びの諸相の実態調査を行い、江戸時代に生きた人々のことば遊びの具体的な志向を把握する。すなわち、ことば遊びという観点から日本人の日本語に対する向き合い方の一端を解明しようとする画期的かつ意欲的な研究と自負している。

#### 3. 研究の方法

主として全国の公立及び私立図書館・文庫・博物館・美術館等の機関に所蔵されることば遊びに関わる江戸時代に成立し発行された見立番付資料、往来物資料を閲覧調査し、写真撮影・現像もしくは複写を行う。これによって、江戸期のことば遊び関連文献資料の収集を図る。以前に支給していただいた科研費による研究によって、どの機関にこういった往来物資料、見立番付資料が所蔵されているかについては認知しており、基本的な準備はできている状況である。

勤務校での研究教育の合間に調査ができるように日程を調整し、関西地区（大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館、天理大学図書館など）、東海地区（名古屋市蓬左文庫、名古屋市立鶴舞中央図書館、徳川美術館など）、東京都内（国立国会図書館、国文学研究資料館、東京都立中央図書館、東京大学総合図書館、東京大学史料編纂所など）、北陸地区（石川県立図書館、石川県立歴史博物館、金沢市立玉川図書館など）に所蔵されていることば遊び関連の文献資料を閲覧させていただき、写真資料の収集を図る。

そして、それらの調査によって得られた成果を年度ごとに論文として発表する。また既に刊行されていることば遊び関連の図書を設備備品として購入し、調査の際の参考資料として用いることとする。

#### 4. 研究成果

平成30年度は研究期間の初年度に当たり、往来物及び見立番付資料の閲覧調査のため、9月に国文学研究資料館及び東京都立中央図書館を訪れた。国文学研究資料館ではマイクロフィルム資料によって上田市立図書館花月文庫所蔵『諸国名山往来』、飯田市立図書館堀家蔵書所蔵『児女長成往来』といった十返舎一九作の往来物を調査するとともに、国文学研究資料館所蔵『あほうとかしこの番附』『浮世かしこの番附』『あほうらしい番附』などの見立番付資料を調査することができた。東京都立中央図書館では見立番付資料である『吾妻みやげ』（東京誌料所蔵）、『吾妻土産』（加賀文庫所蔵）、『江戸自慢』（特別買上文庫所蔵）を閲覧調査した。また3月には大阪市立中央図書館を訪ね、見立番付資料『浪花みやげ』の閲覧調査を行うことができた。一方、同一外題でも収録された見立番付の内容が異なる『那賑和美家藝（浪花みやげ）』『吾妻土産』『江戸自慢』『松の寿』を古書店から購入し、調査した。また、『隅田川往来』についても古書店から購入し、調査を開始した。

令和1年度は研究期間の2年目に当たり、往来物及び見立番付資料の閲覧調査のため、8月に東京都立中央図書館、国文学研究資料館を訪れた。都立中央図書館への訪書では特別文庫に伺い、加賀文庫本『なにわにやげ』『浪花土産番附』『吾妻土産』『諸番附帖』『鵜訓歌字尽』をはじめとする合計11点の写本・版本を閲覧調査した。国文学研究資料館ではマイクロフィルム資料及び紙焼写真資料によって十返舎一九作の『婦人手紙之文言』（茨城県立歴史館所蔵）、鼻山人作の『木曾路往来』（国文学研究資料館所蔵）といった戯作者が創作した往来物を調査するとともに、『幼稚遊昔雛形』（名古屋市鶴舞中央図書館所蔵）、『稚遊び』（名古屋市蓬左文庫所蔵）などの江戸時代末期の子ども向け遊戯本、さらには広義の往来物に含まれる『時勢恋の文づくし』（国文学研究資料館所蔵）、『恋のふみづくし』（香川大学附属図書館〈神原文庫〉所蔵）等を閲覧調査した。一方、『東海道往来』『歌字盡』『名頭字』『京町尽』『専玉古状揃宝蔵』『宝便古状揃大成』『満喜用文連珠海』などの往来物、『流行志里とり子供もんく』（3枚摺1組）『絵本常盤謎』『びっくり草紙 なぞづくし 初編』『真案名曾阿王せ』や見立番付の『文字書違見立相撲』『文字書違見立二編』『人名附物見立相撲』『重言見立大角力』などの江戸期ことば遊び資料、『子供阿そび兒をとる兒をとる』『新版子供阿そび』の子ども向け遊戯本等を古書店から購入し、調査を開始した。

令和2年度は研究期間の3年目に当たる重要な年であったが、前年に引き続きコロナ禍のため、出張による調査研究が全く実施できなかった。そんな中、丹念に資料の掘り起こしを行い、古書店から多くの貴重な文献資料を購入することができた。『御家即席案文』『文しなん』『大和言葉』『新編二十四孝絵抄』『手紙文言 年始の文』『万民調法 書状早指南』などの往来物やそれをパロディーにした『浮世滑稽附会案文』『諸用附会案文』『道外実語教』などの滑稽本、『なぞかけ』『新板なぞなぞ合』『新板地口 糸ほん東京産物』『常磐津外題考物』『清元外題考物』『判じ絵（仮題）』『附会季撰草紙』『新版附会三才図会 初編』『大新板附会三才図会』や見立番付の『たのしみ草紙』『浪花みやげ』などの江戸期ことば遊び資料、『ちんわん唄』『開帳遊講徒呂トロ』『戯画猿回し幽霊』などの子ども向け遊戯本等を古書店から購入し、調査を開始した。これらのうち『附会季撰草紙』『大新板附会三才図会』初編・二編・三編、『新版附会三才図会 初編』の三点は特に貴重な文献で、それらの資料を基にして「附会（こじつけ）」という名のことば遊び『附会季撰草紙』『大新板附会三才図会』『新版附会三才図会 初編』紹介」（『日本アジア言語文化研究』第15号〈令和3年3月〉）という研究論文を執筆することができた。

この論文は「しゃれ」を活用したことば遊びである「附会(こじつけ)」の名を持つ一枚摺り資料『附会季撰草紙』『大新板附会三才図会』初編・二編・三編、『新版附会三才図会 初編』の三種を図版写真・翻字とともに紹介し、それら三種の成立過程における相互の関係について解明した。文化年間以降寺子屋の数が急激に増加し、庶民の子弟教育の熱が高まりをみせたことはよく知られている。その結果、多くの往来物が創作され出版されたが、大坂の町ではより幅広い年齢層の庶民が同音異義をはじめとする日本語のことば遊びに関心を持つようになり、多くのことば遊びの摺物が出回ることにつながった。まずは『附会季撰草紙』が当時最大の文化都市大坂で成立し、その後『附会季撰草紙』をもとにして『大新板附会三才図会』初編・二編・三編が成立した。その成立の背景には大坂での見立番付出版ブームがある。大坂版の見立番付は『浪花みやげ』に収録されたが、そのひとつとして『大新板附会三才図会』初編・二編・三編が摺られたのである。大坂でのブームはすぐに江戸の町にも伝播し、『浪花みやげ』をもとにした『吾妻土産』が上梓されたが、それと軌を一にしたのが大坂版の『大新板附会三才図会』をもとに江戸で摺られた『新版附会三才図会 初編』であった。

令和3年度もコロナ禍のため出張を伴う文献調査を自粛する中で、古書市場に出ている資料の掘り起こしを丹念に行い、多くの貴重な資料を収集し、調査研究することができた。具体的には『番付大日本名山高山見立相撲』『世間通言鳥づくし見立』『うき世太平楽はんぶん言人見立』『神道伝道むりもんだふ』『見だしなみ戯訓六歌仙』『うそくらべ見立評判記』『新板しりとりもんく』『頭書絵入世話字往来』『世話字往来教車』『往来物いろは漢字七体』などを購入し、調査対象とした。なお、当該年度の成果としては、前年度に購入したことば遊び遊びを主題とする見立番付資料である『人名附物見立相撲』について調査を深め、「ことば遊びの見立番付 - 『人名附物見立相撲』紹介」(『日本アジア言語文化研究』第16号<令和4年3月>)という論文を執筆することができた。

この論文は擬人名をテーマとした一枚摺り見立番付『人名附物見立相撲』を図版写真・翻字とともに紹介し、解説を加えた。当該資料にはことば遊びの要素が色濃く反映されており、収録された擬人名が多岐にわたる点に大きな特徴がある。それは単に収録された擬人名の数が多いというだけに止まらず、擬人名の由来についても多種が指摘でき、宮武外骨編『日本擬人名辞書』(大正10年・半狂堂)や鈴木棠三編『擬人名辞典』(昭和38年・東京堂)等の従来の擬人名集成に登録されてこなかった珍しい例が多く見られることを指摘した。擬人名研究には不可欠の資料として注意すべき見立番付であることを解明した。

令和4年度は引き続きコロナ禍が収束しない状況の中、出張計画を立てることが叶わず、またもや研究の進捗が遅れることになった年度であった。本年度も出張を伴う文献調査を自粛する中で、古書市場に出た古書資料の掘り起こしを丹念に行い、多くの貴重な資料を購入し、収集することができた。具体的には『重言見立大角力』『能人の言重言くらべ』『考物壹萬題：智恵くらべ』『志んはんみぶりあなづくしいやみの角力』『破家多分間抜婦抜野路間辺羅坊』『松酒壽』『新法狂字図画』『新工夫狂言尽考物』『新作地口行燈』『なんでもかんでも喰競見立角力』『文字書違見立相撲』『文字書ちがひ見立』『文字書違見立二編』などの日本語ことば遊びに関わる貴重な文献を購入し、調査対象とした。なお、それらの調査の一部をもとに「重言の見立番付 - 『重言見立大角力(天保十一年冬板)』『重言見立大角力(増補版)』『重言見立大相撲』『重言見立相撲(仮題)』『能人の言重言くらべ』紹介 - 」(『日本アジア言語文化研究』第17号<2023年3月>)という論文を執筆することができた。

この論文は、日常的に話す日本語の中で、慣用的に同義の語を重ねて用いる「重言(じ

ゅうごん)」の一枚摺り見立番付の資料五種を取り上げ、図版写真・翻字とともに紹介し、成立過程における相互の関係について言及した。五種は見立番付としての形態や、収録される重言の用例数などから成立順を判断することができる。結論として、最初に『重言見立大角力(天保十一年冬板)』が成立し、その後『重言見立大角力(増補版)』『重言見立大相撲(ぢうごんみたておほすもふ)』『重言見立相撲(仮題)』『能人の言重言くらべ(よくひとのいふぢうごんくらべ)』の順に成立したことが推定できることを述べた。

令和2年度～令和4年度にかけての3年間はコロナ禍の影響を受け、出張を伴う文献の調査ができず、研究が停滞していた。本研究は当初令和3年度までの4年間の研究予定であったが、そのうち後半の2年間については研究計画のごく一部しか遂行できなかったため、期間延長を認めていただき、令和5年度が研究を締めくくる最終年度となった。

令和5年度はこれまで計画した調査が実施できていなかった石川県立歴史資料館、東京都立中央図書館、東京大学史料編纂所、国立国会図書館東京本館、国立国会図書館関西館を訪問し、見立番付・おもちゃ絵を中心とする貴重な文献資料を調査することができた。具体的には石川県立歴史資料館で村松家資料の「重言ことば角力見立 初偏」「重言ことば角力見立 二偏」「新版魚類貝類はんじもの」(見立番付集『たのしみ草紙』所収)の原本を披見した。また、東京都立中央図書館では「重言世界咄」とその袋物(見立番付集『洗雲彩霞』所収)をはじめ「能人の言重言くらべ」「重言見立 御為心得」「文字書違見立相撲」(見立番付集『江戸自慢』所収)、「重言見立大相撲」「文字書ちがひ見立」(見立番付集『吾妻みやげ』所収)その他を閲覧・調査した。東京大学史料編纂所では「大日本くにつくしはんじ物」「当時流行なぞなぞづくし」(『風刺行列附等』所収)その他を閲覧・調査した。国立国会図書館東京本館では「重言見立大相撲」「能人の言重言くらべ」(『江戸自慢』所収)その他の資料を、また同関西館では『芳藤手遊絵尽』を閲覧・調査した。それぞれ貴重な文献資料であり、江戸時代末期から明治時代初期にかけての見立番付やおもちゃ絵のなかに構築された日本語ことば遊びを中心とした文化的な様相を重層的に捉える礎となった。なお、以上の調査をもとにした本年度の成果として、拙稿「重言の見立番付続考 - 」(『日本アジア言語文化研究』第18号<2024年3月>)を執筆した。

この論文は、前稿「重言の見立番付 - 『重言見立大角力(天保十一年冬板)』『重言見立大角力(増補版)』『重言見立大相撲』『重言見立相撲(仮題)』『能人の言重言くらべ』紹介 - 」(『日本アジア言語文化研究』第17号<2023年3月>)を承け、重言を題材とした見立番付のうち、石川県立歴史博物館所蔵『重言ことば角力見立 初偏』『重言ことば角力見立 二偏』の二種と、東京都立中央図書館加賀文庫所蔵『重言世界咄 爲御心得言葉乃穴さがし』の合計三種を取り上げて図版写真・翻字とともに紹介し、前稿で紹介した五種も含めて成立順や相互の関係の有無について判断した。結論としては『重言ことば角力見立 初偏』『重言ことば角力見立 二偏』は江戸の町での成立と推定され、他の重言の見立番付とは系統を異にする独自性が認められること、また『重言世界咄 爲御心得言葉乃穴さがし』は『重言見立大角力(天保十一年冬板)』やその系譜に連なる『重言見立大角力(増補版)』『重言見立大相撲』などを参照して成立した可能性が高いこと、同じ「重言堂」という版元名を持つ「能人の言重言くらべ」に先行することなどを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野恭靖	4. 巻 18
2. 論文標題 重言の見立番付続考 - 『重言ことば角力見立 初編』 『重言ことば角力見立 二編』 『重言世界咄 為御心得言葉乃穴さがし』 紹介 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野恭靖	4. 巻 17
2. 論文標題 重言の見立番付 - 『重言見立大角力（天保十一年冬板）』 『重言見立大角力（増補版）』 『重言見立大相撲』 『重言見立相撲（仮題）』 『能人の言重言くらべ』 紹介 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野恭靖	4. 巻 16
2. 論文標題 ことば遊びの見立番付 - 『人名附物見立相撲』 紹介 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野恭靖	4. 巻 15
2. 論文標題 「附会」という名のことば遊び 『附会季撰草紙』 『新版附会三才図会 初編』 『大新板附会三才図会』 紹介 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野恭靖	4. 巻 13
2. 論文標題 新出おもちゃ絵の歌謡資料七種紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本アジア言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小野恭靖	4. 発行年 2019年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 121
3. 書名 室町小歌 戦国人の青春のメロディー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------